

修士論文（要旨）
2024 年 1 月

JSL 学習者の教室外リソースの「意図的不使用」に関する考察
—N1 高得点取得者を対象とした相互作用分析をもとに—

指導 山本 薫 教授

国際学術研究科
国際学術専攻
グローバルコミュニケーション実践研究学位プログラム
222J1008
李 天淳

Master's Thesis (Abstract)
January 2024

JSL Learners' "Intentional Non-Use" Of Resources Outside the Classroom: An Interaction
Analysis of JLPT High-Scorers' Practice

TIANCHUN LI
222J1008
Master of Arts Program in Global Communication
Master's Program in International Studies
International Graduate School of Advanced Studies
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Kaoru Yamamoto

目次

序章.....	1
第1章：自律学習とリソースについて.....	3
1.1 自律学習と学習者オートノミー.....	3
1.2 本稿におけるリソース.....	3
1.3 リソースの取捨選択の必要性.....	4
1.4 リソースとの相互作用が生み出すもの.....	4
1.5 意図的に使用されていないリソースへの気づき.....	5
第2章 先行研究.....	6
2.1 学習者オートノミーに関する先行研究.....	6
2.2 学習リソースの利用に関する先行研究.....	6
第3章 調査概要.....	8
3.1 研究対象.....	8
3.2 研究課題.....	9
3.3 調査方法.....	10
3.4 分析方法.....	15
第4章 インタビュー調査の結果.....	16
第5章 結果の分析.....	34
5.1 相互作用分析.....	34
5.2 共通点の分析.....	38
第6章 考察.....	39
第7章 結論および今後の課題.....	41
7.1 結論.....	41
7.2 今後の課題.....	42

参考文献

池田（2015）が述べているように、日本では様々な日本語学習者が増えている。日本語教育においても、異なる学習者のニーズや目的に対応し、教授法が従来の教師主導型から学習者主導型へと変わりつつあり、それに適合した学習方法も求められるようになっていく（梅田，2005）。青木（2005）は学習者が能動的に自身の学習を評価、管理する能力を学習者オートノミーと定義し、学習者オートノミーが発揮された行動が自律学習であると述べている。現在の日本語教育では、自律学習がかなり注目されている。

実際に留学生が教室内で日本語を学ぶ時間は限られており、教室外での学習が言語学習効果に大きく影響している。しかし、管見の限り自律学習に関わる研究において教室外はあまり注目されていない。そこで、筆者は自らの日本語学習経歴の中で、教室外で様々なリソースを自身に適合したものを選んで日本語学習に使用した経験から JSL 学習者のリソース使用に興味を持った。そして日本語学習者リソース使用に関する先行研究を調べていくうちに、「使用されなかった」リソースがほとんど注目されていないことに気づいた。筆者は自身の日本語学習を振り返り、母語が中国語の人や中国語に翻訳されたものなどのリソースを意図的に使用していなかった。その結果ネイティブに近い日本語運用力を身に付け、日本語能力試験 N1 で満点を取得できた経験から、自身と似たような日本語学習者（以下 N1 高得点学習者）の「リソースの意図的不使用」について興味を持った。

工藤（2006）や浜田（2004）、文野（2004）、トムソン木下（1997）などの研究から、学習者とリソースを使用する際に、リソースとの間に相互作用が起こっており、学習に様々な影響を与えていることがわかった。彼らの研究から、筆者はリソースとの相互作用はリソースを使用することに限らない可能性があるというひらめきを得た。そして学習環境の中にあるリソースの存在を学習者が意識し、リソースに対して何らかの行為を行うことを相互作用だと捉え、何らかの理由を以ってあえて使用しないことも相互作用であり、学習に影響をもたらしているという仮説を立てた。

さらに、Rubin（1975）で行われた優れた学習者の学習ストラテジーに関する「Good Language Learner 研究」と Skehan（1989）で主張された学習者要因から、N1 高得点学習者のリソース使用について研究することで、他の学習者の学習を導くヒントを得られることを期待できると予想し、N1 高得点学習者の「リソースの意図的不使用」について、彼らはどのようなリソースをどのような理由で意図的に使用しないようにしていたか、その行為にどんな相互作用が見られるのか、彼らの間に共通している部分が何かを明らかにするため、研究を行った。

留学生時期の学習リソース利用状況に関するチェックリスト調査と意図的に使用しなかったリソースにコミットしたインタビュー調査を 3 名の N1 高得点学習者を対象に行い、整理、分析した。その結果、自身の日本語力の向上と日本社会文化理解の役に立たないことを理由に、母語が日本語ではない相手とのやりとりを意図的にしていなかったことや効率が悪く日本語学習に向いていないという理由でマンガ、雑誌、参考書など紙製のものを意図的に学習に使用しないようにしていたこと、客観性や公正性がなく日本社会文化を客観的に理解できないことを理由に、固定観念が入っている偏ったニュース報道やステレオタイプの人間などのリソースと接触することを意図的に避けていたことなどの「リソース

の意図的不使用」が見られた。そしてこれらの「リソースの意図的不使用」が彼らに学習動機を生み出し、日本語の技能の練習になる機会を作りだしていたことも明らかになっていた。

さらに、3名の調査協力者の語りから、彼らが常に自身と学習を評価し、自分を取り巻く環境を評価していたことが解明された。彼らの行動はまさに学習に対する意思決定やコントロール、評価をする能力、つまり学習者オートノミーが発揮された自律学習であると言える。限られた時間やリソースの多様性、教室内学習時間の制約など、JSL 学習者にとって自律学習が求められる要因は様々である。本研究が JSL 学習者に自律学習の重要性を気づかせ、学習者オートノミーの育成に目を向けるきっかけになれることを願う。

参考文献

- 青木直子. (1998). 学習者オートノミーと教師の役割 『報告書—自律学習をどう支援するか』 p23 分野別専門日本語教育研究会.
- 青木直子. (2005). 「自律学習」 『日本語教育辞典』 大修館書店
- 池田伸子. (2015). 学習者の多様性に対応できる日本語教育とは: 高等教育機関における日本語学習者支援体制の構築に向けて. ことば・文化・コミュニケーション: 異文化コミュニケーション学部紀要, 7, pp. 115-126.
- 梅田康子. (2005). 学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割. 愛知大学 言語と文化, 12, pp. 59-77.
- 岡部眞理子. (2012). 短期留学生のリソース活用に関する調査研究: リソース活用の実際と, 人的リソース活用に影響を与える要因. 言葉の学び, 文化の交流: 山梨大学留学生センター研究紀要=言葉の学び, 文化の交流: 山梨大学留学生センター研究紀要, 7, pp. 1-18.
- 王俊. (2015). 優れた中国人日本語学習者の学習ストラテジー: 日本語専攻学習者 2 名の質的調査から. 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要, 1, pp. 49-62.
- 欧麗賢. (2016). 「日本語学習者がインターネット上のリソースを教室外の学習に利用し始めるメカニズム: 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) による理論構築」 『阪大日本語研究』, 28, pp. 77-108
- 金庭久美子. (2004). リソースの活用を目指した授業—インターネットを利用した読解授業—. 日本語教育方法研究会誌, 11(1), pp. 4-5.
- 国立国語研究所. (2006). 『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 海外調査報告書』
- 工藤節子. (2006). 「台湾の日本語学習者の学習リソース利用—インタビュー調査から」 『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 海外調査報告書』 国立国語研究所, pp. 83-107.
- 田中望・斎藤里美. (1993). 『日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発—』 大修館書店
- 谷口美穂. (2012). 日本語学習者の視聴覚メディア使用: インタビューからみえた教室外における自律学習の実態. 言語教育研究, 2, pp. 65-74.
- トムソン木下千尋. (1997). 「海外の日本語教育におけるリソースの活用」 『世界の日本語教育』 第 7 号, pp. 17-29, 国際交流基金日本語国際センター
- 浜田麻里. (2004). 「研究の理論的枠組み」 『日本語学習者と環境との相互作用に関する研究』 平成 13 年度～平成 15 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書, pp. 3-10
- 林さと子. (1998). 第二言語学習/習得と個別性要因. 第二言語としての日本語学習および英語学習の個別性要因に関する日本語教育の概要 平成, pp. 8-9.
- 林希和子, 陳静怡, 李雪, & 義永美央子. (2021). JSL 学習者の日本語実践における ICT ツールの使用状況: モバイル端末の利活用に関する質問紙調査報告. 多文化社会と留学生交流: 大阪大学国際教育交流センター研究論集, 25, pp. 75-83.
- 春原憲一郎. (1992). ネットワーキング・ストラテジー—交流の戦略に関する基礎研究. 日

- 本語学』 1992 年, p. 10.
- 文野峯子. (2004). 日本語学習者と環境との相互作用に関する研究.
- 真嶋潤子. (2005). 学習者の個人差と第二言語習得-「学習スタイル」を中心に-. 第二言語としての日本語の習得研究, (8), pp. 115-134.
- 丸山千歌・小澤伊久美. (2008). PAC 分析におけるフェイスシートの開発に向けた課題: 日本語教材と学習者のインタラクションの解明に向けた研究のために. 横浜国立大学留学生センター教育研究論集, 15, pp. 3-20.
- 三宅若葉. (2007). 教師はどのようにリソースを捉えているのか: 自律的な学習を目指した日本語学習の場合. 桜美林言語教育論叢, 3, pp. 51-62.
- 山元淑乃. (2011). 学習者主体の活動型授業: 学習者オートノミーの育成を目指して琉球大学留学生センター紀要, 8, pp. 73-92
- J V・ネウストプニー. (1995). 『新しい日本語教育のために』 大修館書店
- Benson, P. (2011). Language learning and teaching beyond the classroom: an introduction to the field. In P. Benson, & H. Reinders (Eds.), *Beyond the language classroom* (pp. 7-16).
- Cohen, A. & Dörnyei, Z. (2002). Focus on the Language learner: Motivation, styles and strategies. In N. Schmitt (Ed.), *An introduction to applied linguistics*. (pp. 170-190). Arnold.
- Holec, H. (1981). *Autonomy and foreign language learning*. Oxford: Pergamon. (First published 1979, Strasbourg: Council of Europe)
- Rubin, J. (1975). What the 'good language learner' can teach us. *TESOL Quarterly* 9, pp. 41-51.
- Selinker, L. (1972). Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics*, 10, 3, pp. 209-31.
- Skehan, P. (1989). *Individual Differences in Second Language Learning*. London: Edward Arnold.
- ARAI, H., FUNAYAMA, K., & TAKE, K. (2010). 「教室内に自律的コミュニケーションを構築するためにクラス参加者間のインターアクションを支える『きく』」WEB 版『日本語教育実践研究フォーラム報告』 2010 年度日本語教育実践研究フォーラム http://www.nkg.or.jp/pdf/jissenhokoku/2010RT1_arai.pdf (2023/05/15 にアクセス)